

# 宗教・文化研究所公開講座講演録要旨

## 北条義時と京都・鎌倉

山本みなみ

ただ今ご紹介いただきました、鎌倉市で学芸員をしております山本と申します。よろしくお願ひ致します。私は、京都女子大学の出身で、十年ほど前には受付の係をやっていましたが、こうして母校で登壇する機会をいただき、感慨深く、非常に光栄に思っています。本日は、放映中の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」の主人公・北条義時のお話をさせていただきます。

はじめに―北条義時とは何者か？ 理想的な忠臣から稀代の逆臣へ

まず、北条義時とは何者かということですが、義時が大河ドラマの主人公に選ばれたことは、研究対象としている私も大変驚きました。日本史の教科書には登場しますが、一般的にはあまり知られていない人物だからです。

なおかつ、北条義時は、これまでの歴史の中であまり良いイメージで語られてきた人物ではありません。承久の乱の際に後鳥羽院と戦い、勝利すると、義時は後鳥羽院を配流に処します。このことが原因で、とくに近世以降「稀代の逆臣」と評されるようになります。

加えて、義時の生きた時代は、源頼朝、息子の頼家・実朝の三代で源氏将軍が途絶えてしまい、その後、北条氏が権力を掌握し、得宗専制へとつながっていくことになりました。こうした状況から、江戸時代には、幕臣で歴史学者でもある新井白石が、「実朝暗殺も実は義時が裏で仕組んでいて、実朝を殺して実権を握ったのではないか」と批判していますし、近年では「北条義時は、将軍から政治の実権を奪った、陰險な策謀家である」とも言われています。

しかし、義時と同時代を生きた人々の評価は違います。義時は、「武内宿禰の再誕」であると認識されていました。武内宿禰は、伝説上の人物ですが、理想的な忠臣の代表として神話に登場します。義時は、そういう人になぞらえられているのです。

したがって、義時の評価は非常に高かったのですが、近世以降、一八〇度変わってしまいます。その背景には、やはり承久の乱があるので、最後の「第五章」では、義時の評価の変遷についても触れたいと思います。

義時の先行研究については、安田元久先生が、『人物叢書 北条義時』（吉川弘文館、一九六一年）を書かれていたり、最近では岡田清一さんも書かれています。近世以降、どちらかというとマイナスに評価されてきた義時を再評価しようという流れの中にあります。

なお古く、明治・大正期の学者である萩野由之は、将軍から実権を奪ったことから、「篡奪者」と悪く言われていた北条氏を、「幕府の保護者」であると評しました。すなわち、「実朝が暗殺され源氏将軍が途絶える、あるいは

承久の乱で朝敵になるかもしれないという困難を乗り越え、鎌倉幕府を守ったのは北条氏であるのだから、幕府の保護者としての側面も見ざるべきではないか」というのです。私も、この見解に従って義時を評価していきたいと思っています。

### 一、頼朝との出会い

まず、北条義時の生涯について、源頼朝の出会いから紐解いていきたいと思います。義時は、一一六三年に伊豆国田方郡北条に生まれました。父時政が二十六歳のときの子で、すでに六歳年長の姉政子がいいます。

そもそも北条氏はどういう一族かというと、野口実先生がご研究されているところですが、伊豆国の在庁官人、すなわち国衙の行政実務を担当する役人であったと考えられます。

#### (一) 北条氏とは？

北条氏の成立については、いくつか系図が残っていますが、混乱が見られて、謎に包まれている部分も多いです。時政からすると祖父、義時からすると曾祖父にあたる時家という人物あたりから、伊豆国の住人や、北条介といった注記が見えてくるようになります。

これは佐々木紀一さんが指摘されていることですが、『源平闘諍録』という史料に、「時家、北条介の娘に嫁す」とあり、在庁官人の北条介の一族に時家が娘婿として入ったことがわかります。これに従えば、北条氏の成立は、時政の祖父の代ということになります。

では、時家は伊豆に土着する前は どうして いたのかという と、京都で治安維持などにあ たつて いたよう です。したがって、北条氏は、京都とのつながり、人脈であったり、情報収集をする手段を持つ一族であったと考えられています。

## (二) 北条氏の本拠地

北条氏の本拠地である伊豆国北条は、伊豆半島の付け根に位置します。先ほど、北条氏は在庁官人(国衙の役人)である、と申しましたが、伊豆国の国衙は三島にあったことが分かっていますので、比較的近い場所です。

伊豆半島の真ん中には、狩野川が流れていますが、北条は狩野川のすぐ傍に位置しており、河川交通の便の良いところ です。また、伊豆半島は、山だらけの険しい半島ですけれども、北条は その中で唯一の平野部に位置し、農業生産力の高い場所でもあります。南伊豆や東伊豆の伊東の方へ行くにしても、ここが中間地点になって、陸上交通の要衝でもあるという場所を押さえています。

北条氏の邸宅は、守山と呼ばれる小さな山の麓にありました。守山のすぐ近くに狩野川が流れています。これだけ川に近いと、便利が良い一方、洪水の心配がありますが、守山の麓は微高地であるため、被害を受けることはありませんでした。

## (三) 源頼朝の配流

源頼朝は、今お話ししました伊豆国に流罪となりました。きっかけは平治の乱です。父義朝が亡くなり、頼朝自身も平家に捕らえられてしまいます。平清盛の継母である池禅尼の助命歎願もあって、命だけは助けられ、伊豆に流

されました。ここから三十四歳まで二十年に及ぶ流民生活を送ることになります。ちなみに、流罪から三年後に北条義時が生まれています。

頼朝の監視には、伊東氏が当たったと考えられます。流民生活は、そこまで不自由なものではなく、頼朝は伊東祐親の三女との間に男子千鶴を儲けています。しかし、激怒した祐親によって、男子はすぐに殺されてしまいました。『源平盛衰記』によれば、その理由は流人として預かっている源氏が娘婿になれば、平家から咎められるのではないか、というものでした。

さらに、祐親は頼朝の命も狙ったため、頼朝は北条氏のもとに逃れました。この一件は、頼朝が伊豆に流されてからおよそ十五、六年たった頃の話と考えられています。その後、ご存知のとおり、北条政子と親密な関係となり、長女の大姫が誕生します。さらに、治承四年（一一八〇）八月には、伊豆で兵を挙げ、平家家人の山木兼隆を討つと、伊豆を出て東に進みます。石橋山の合戦では負けてしまいましたが、房総半島に渡って北上し、味方を増やして、およそ二カ月後、いよいよ鎌倉に入ります。

#### （四）鎌倉入部と町づくり

治承四年（一一八〇）十月、頼朝一行が鎌倉に入りました。ときに義時十八歳。

ここで、「なぜ頼朝は鎌倉を選んだのか」ということについて触れておきたいと思います。結論から申せば、交通の要衝であったことと、源氏ゆかりの地であったことが大きいと考えられます。

『吾妻鏡』によれば、鎌倉はもともと辺鄙なところで、漁師や農民のほかに住む者は少ないような場所であったが、頼朝が入ってきたことによって発展したといえます。しかし、これは『吾妻鏡』の編纂者が、頼朝以前と以後の鎌

倉の変化を劇的に描こうとした結果にすぎません。頼朝入部以前の鎌倉が決して辺鄙な場所ではなかったことは、鎌倉市内の発掘調査の成果から明らかです。

昭和五十九年（一九八四）から平成四年（一九九二）にかけて行われた御成小学校（今小路西遺跡）の発掘調査では、大規模な建物跡や天平五年（七三三）の銘をもつ木簡がみつき、この場所が古代、鎌倉郡（現在の鎌倉市と藤沢市・逗子市・横浜市の一部）の郡家であったことが判明しました。郡家には、支配域の人々が税を納めるために集まってきました。当然、郡家は辺鄙な場所ではなく、交通の便が良い陸上交通・河川交通・海上交通の結節点に置かれます。鎌倉の場合は、足柄山を越えて相模国に入り、鎌倉郡家を通って三浦半島へ至り、そこから海路で房総半島の上総国に向かう古東海道が通っていました。加えて、古代・中世は、現在よりも海がかなり内陸まで入り込んでいて、郡家の目の前まで河川が迫っていました。かなり郡家の近くまで船で入ってきて、税を納めることができたと考えられます。河川交通、海上交通を利用した便のいい所だったからこそ、頼朝は鎌倉を選んだのでしよう。

もう一つ、源氏ゆかりの地であったことも非常に重要です。『吾妻鏡』治承四年（一一八〇）十月七日条には、頼朝の父義朝の屋敷が亀谷にあったと記されています。また、『天養記』にも、義朝が鎌倉に楯（館のこと）を持っていたとあります。したがって、義朝が鎌倉に屋敷を持っていたことは、間違いありません。

ここで、義時と頼朝の関係について触れておきますと、鎌倉に入った翌養和元年（一一八一）、頼朝の寝所を警護する十一名が選ばれました。『吾妻鏡』によれば、選ばれる条件は二つあったといえます。一つは、「弓箭に達する者」、つまり弓矢が上手な武芸に優れている者、もう一つは「御隔心なき者」、すなわち頼朝とのあいだに隔たった心がない＝信用できる者ということです。この十一名の筆頭に義時は選ばれており、頼朝の信頼を得ていたこと

がうかがえます。

また、次男の実朝が誕生したときには、頼朝が六名の御家人に護り刀を献上するように命じています。彼らに実朝の後ろ盾となって支えていくことを期待したのだと思いますが、この筆頭に名前が挙がっているのが義時です。頼朝としては、次の世代、自分の息子の代を担う中心的人物として、義時に期待を懸けるところがあつたのではないのでしょうか。

最も頼朝が義時に期待を懸けていたことを示すのは、義時の婚姻です。『吾妻鏡』によれば、義時は一、二年ものあいだ、「権威無双の女房」である姫の前（比企朝宗の娘）に艶書を送り続けていたが、全く相手にされず、見かねた頼朝が、義時に「絶対に離縁しません」という誓約書を書かせて姫の前に渡し、二人の仲を取り持つて結婚に至ったといえます。ここで重要なのは、頼朝が仲介しているという点です。頼朝は、長く流人生活を送っていますが、その大変な時期を支えてくれたのが北条氏と比企氏でした。ゆえに、両氏が中心となって、幕府を運営し、息子たちを支えていってほしいと考えていたと思います。

頼朝は、比企一族の女性と北条一族の息子義時の婚姻を実現することによって、源氏將軍家を支える両一族の一体化を図ったのではないのでしょうか。義時には、両一族を繋ぐ架け橋としての役割を期待していたのではないかと思ふのです。

## 二、武家政権の中核へ

建久十年（一一九九）に頼朝が急死すると（享年五十三）、次の將軍には、長男の頼家が就任しました。ただし、まだ十八歳で政治の経験もないことから、將軍頼家を有力御家人の十三人が支えていく体制を設けます。これが、大河ドラマのタイトルにもなった「鎌倉殿の13人」ということになります。

十三人のメンバーを見ますと、二つのグループに分かれます。一つが文士（文筆吏僚）のグループで、大江広元ら、もともと京都の朝廷で働いていた官人たちです。もう一つが武士のグループで、比企能員や三浦義澄といった幕府草創期から頼朝を支えてきた五、六十代の御家人たちが選ばれています。このうち、唯一親子で入っているのが北条時政・義時です。なおかつ、義時は一人だけまだ三十代です。

従来の研究では、「十三人の合議制」と呼ばれ、十三人が集まって、將軍頼家の代わりにさまざまなことを決定していたと言われていましたが、近年では、十三人のうちの数名の協議を経て、最終的な判断は頼家に仰ぐというシステムであったと考えられています。

ところで、この十三人のメンバーは、誰が決めたのでしょうか。私は、頼朝の後家である北条政子が関与した可能性があると考えています。頼朝の権威を引き継いだ政子は、將軍頼家に対しても発言権を持ちます。頼家の時代になれば、これまで頼家を養育してきた比企氏が力を持つことは目に見えていますので、牽制するという意味でも、北条氏から二名も選んだのではないかと考えています。

ただし、この体制は長くは続きませんでした。翌年には梶原景時が失脚し、さらに安達盛長と三浦義澄も亡くなっ



てしまいます。

(一) 比企能員の誅殺、北条氏の軍事クーデター

比企能員は、夫婦で頼家の乳母＝養育者を務めています。さらに、娘の若狭局を頼家に嫁し、一幡という男子が誕生しています。比企氏としては、当然、頼家の次の将軍に一幡を考え、大事に育てているわけです。

先に述べたとおり、頼朝は比企一族を重用しています。これはやはり流人時代に援助を惜しまなかった比企尼(頼朝の乳母)の恩に報いるためでしょう。能員は、比企尼の甥にあたりますが、養子関係を結んでいました。頼朝も能員を重用し、もともと大切な長男頼家の養育を任せています。

さて、二代將軍頼家の時代が始まりましたが、四年後には頼家が重病を患い危篤に陥ります。早くも次の將軍をどうするのかという問題が生じ、六歳の息子一幡にするのか、十一歳に成長した弟の千幡(のちの実朝)にするのかをめぐって、比企氏と北条氏は対立します。

千幡の乳母は、政子の妹の阿波局と阿野全成夫妻が務めており、將軍外戚の立場を得るためにも、北条氏が千幡を推すのは当然のことでした。頼家が出家し、將軍職を息子へ譲ろうとしていることを聞くと、追い込まれた北条氏は、軍事クーデターを起こします。いわゆる「比企氏の乱」と呼ばれる事件ですが、実際は北条時政によるクーデターです。能員を名越の邸宅に招いて、だまし討ちをしています。能員が討たれた後、比企一族は一幡の居所である小御所に集結しますが、政子の命令によって義時や平賀朝雅たちが攻め込んで、比企一族は滅亡します。

一幡の生死については、『吾妻鏡』と『愚管抄』で相違があります。『吾妻鏡』は、一幡は焼死したとしますが、『愚管抄』は、取り逃がしてしまい、二カ月後に義時の手下が見つけて殺したと書いています。『愚管抄』は同時代を

生きた天台座主慈円の著作であるだけに、その記述は無視できるものではありません。『愚管抄』が史実を伝えるならば、比企氏滅亡後、北条氏は幼い千幡を擁立するわけですが、最初の二カ月間は一幡の行方がわからない不安定な政治状況であったといえるでしょう。

奇しくも、比企氏が滅んだ後、頼家の体調が回復します。しかし、すでに千幡を擁立することが決まっているため、北条氏は頼家を伊豆国の修善寺に幽閉しました。しかし、『吾妻鏡』や『愚管抄』によれば、頼家の周辺に不穏な動きがあるとの噂が鎌倉に届き、時政の命令により、義時が手下に命じて頼家を殺害しました。義時は、実朝政権を安定に導くためとはいえ、頼家・一幡父子の殺害に深く関わっていたのです。

## (二) 源実朝の擁立と新体制

将軍実朝擁立の翌元久元年（一二〇四）には、実朝と坊門信清の娘との婚姻が進められました。この婚姻は、公武融和を考え、幕府をも取り込みたい後鳥羽院方と、京都との繋がりを背景に権力拡大をねらう時政・牧の方夫妻の利害が一致した結果と考えられます。また、婚姻成立の背景には、後鳥羽院の女房である藤原兼子と牧の方の尽力がありました。

坊門家から正妻を迎えることが決まると、十月十四日、鎌倉から北条政範（時政・牧の方の息子）をはじめとする、多くの御家人が出迎えのために上洛しました。『吾妻鏡』は、入京した御家人の代表を政範ひとりとしませんが、『仲資王記』元久元年十一月三日条は「今夜、遠江守時政入洛すと云々」と記し、同月五日条にも「今日卯剋、遠江守時政の男馬助維政、（政範）早世し了んぬと云々（生年十五歳）」。『去る三日入洛すと云々。路より病有り。是れ母』將軍の北方（坊門大納言の女子）を迎えんがため、数百騎を相具し上洛す」とみえます（『内は墨の濃淡が異なるため、

後の加筆と考えられる)。要するに、三日の夜に時政・政範父子が入京し、五日に政範が急逝しているのです。おそらく、時政が上洛したのは、兼子や坊門家の人々に面謁し、貴族社会との繋がりを深める目的があったのでしよう。しかし、政範の急逝によって、時政はその喪に服するため、急ぎ鎌倉へ戻ったと推測されます。

結局、時政不在の中、信清の娘は、関東に下向しました。坊門家の娘に白羽の矢が立ったのは、貴族との婚姻によって、実朝の権威を補強することを期待したためと考えられます。これより先、坊門家の娘の一人（坊門局）は、後鳥羽院の後宮に入って頼仁親王らを出産しています。したがって、実朝は坊門家の娘を正妻に迎えることで、後鳥羽院と義兄弟の関係になりました。この婚姻は、後鳥羽院の意向によって進められたに違いありませんが、幕府にとっても実朝の権威づけが急務であっただけに、非常に好都合であったと考えられます。

婚姻の成立によって後鳥羽院は実朝と義兄弟となり、かつ坊門家を介して、幕府の実力者である時政との関係も深まりました。その意味で、先に指摘した時政自身が上洛していた事実は重要です。時政の上洛には、京都との繋がりを強めることで北条氏の権威を高める目的があったと考えられます。さらに、前妻の子である義時や孫の泰時ではなく、後妻牧の方との間に生まれた政範を同伴することによって、自身の後継者が政範であることを示す意図を持っていた可能性は高いでしょう。

しかし、時政の思惑通りとはいかず、実朝の権威補完には成功したものの、政範の急逝という不測の事態によって、北条氏の家督は、先妻の系統、つまり義時が相続することが決定的となったのです。このことは、幕府における時政夫妻の政治的立場に重大な影響を及ぼすこととなります。

### (三) 父時政との相克

元久二年(一二〇五)、牧氏の変とも呼ばれる、平賀朝雅擁立事件が起こります。これは、北条時政・牧の方が將軍実朝を廢位し、娘婿の平賀朝雅を將軍に据えようとした計画で、事前に義時や政子の耳に情報が入ったため、未然に防がれました。『愚管抄』によれば、政子はすぐに義時や三浦義村たちに命じて、時政邸に居た実朝の身柄を義時邸に移して確保し、そのうえで父親である時政に隠退を迫っています。

ただし、この時代は親権が絶対です。子が親を追放すれば、親不孝として御家人たちからの信頼を失いかねません。そこで、將軍実朝の命令というかたちをとって、時政に出家・隠退を迫りました。この結果、信頼を失うことなく、時政を政治の第一線から退かせることに成功したと考えます。

『愚管抄』には、「実朝か世にひと成て沙汰しけり」、「此いもうとせうとして関東をばをこないて有けり」とあり、完全に実朝の時代となり、政子と義時が幕府政治を主導していくことになったといえます。ここから、北条政子・義時姉弟を中心とした幕府運営が始まったのです。

## 三、源実朝の時代

### (一) 実朝と義時

義時が実朝を支え、政治を主導するようになるのは、四十三歳のときです。一般に、將軍実朝と執権義時は対立関係にあった。ゆえに、義時が黒幕となって実朝を殺し、実権を握ろうと考えたと語られることがよくあります。將軍と執権はもちろん対立することもあります。基本的には相互に補完する、協調関係にあります。

例えば、將軍実朝は、非常に病弱な体質でした。今の天然痘にあたる疱瘡ほうそうにかかったこともあり。承元二年（一二〇八）、十八歳のときの話ですが、かなり深刻な容態で生死をさまよいました。『吾妻鏡』には、何とか回復はしたけれども、実朝は「疱瘡の跡」をはばかり、三年ものあいだ、鶴岡八幡宮などへの参詣を控えた、と記されています。

「疱瘡の跡」を気にしていたわけですから、目で見て分かる場所に跡が残っていたということでしょう。顔面かなりの傷跡が残っていた可能性があります。本来、將軍は幕府の代表として鶴岡八幡宮に参詣し、関東の安泰を祈る役割がありますが、その責務を果たせないという事態が発生したのです。この難局をいかにして乗り切ったのでしょうか。『吾妻鏡』をみますと、將軍の代理として奉幣使を遣わしています。奉幣使には、義時や大江広元が選ばれています。実朝の代わりをつとめることで、この非常事態を乗り切ったのです。

また、実朝は病弱なこともあってか、初代將軍頼朝のときと比べると、武芸から遠ざかっていきます。しかし、武家の棟梁が武芸を軽んじるなど、あり得ないことです。実朝が弓馬への関心を棄て、御家人たちの心が將軍から離れてしまうことを危惧した義時は、承元三年（一二〇九）十一月、將軍実朝臨席のもと切實的な開催をします。さらに、終了後の酒宴の席では、広元とともに、実朝の御前で、幕府の存在意義は武芸を専らにし、朝廷を警固することであると説いています。実朝が將軍としての役割を十分に果たせず、義時や広元が幕府や將軍の存在意義を改めて確認した事実は、幕府が不安定な状況にあったことを示唆するものです。義時や広元が、病弱な実朝を支えていた様子を垣間見ることができません。

## (二) 和田合戦

父時政の隠退後、幕府運営を主導する義時にとって最も有力な対抗者となったのが和田義盛です。義時は、政所別当ではありませんでしたが、御家人統制の要である侍所は、依然として義盛が掌握していました。年齢的にも義時の十六歳年長であり、梶原氏を弾糾した際には、連署状の披露を躊躇する大江広元を恫喝し、侍所別当の権力の一元化に成功していました。その後、梶原氏・比企氏・畠山氏などの有力御家人が減び、頼朝の死後相次いで安達盛長・千葉常胤・三浦義澄といった草創期以来の重鎮たちが死去したことによって、義盛の存在は相対的に増したと考えられます。

義時と義盛の対立が表面化した契機は、泉親衡の乱です。信濃国の武士である泉親衡が中心となって、義時を殺害、実朝を廃位し、頼家の遺児である千寿丸を新しく擁立することを企んでいたことが発覚します。その企みに関わっていた者たちも次々に明らかとなり、その中には比企氏の残党や、和田義盛の息子や甥が含まれていました。

この事態を受けて、和田義盛はすぐに將軍御所の実朝のもとに行き、弁明して許しを得ますが、義時は和田一族を許しませんでした。自身の命を狙われ、支えてきた將軍実朝にも危害が及ぶ可能性があったわけですから当然です。御所で、和田一族を討つべきであると評議をします。

義時側の動きを察した義盛は、先手を打って拳兵し、將軍実朝の身柄を確保しようとしています。しかし、同じ三浦一門である三浦義村の裏切りに遭い、実朝の身柄を確保することはできませんでした。結局、將軍が味方をした方が正当性を帯び官軍になりますので、和田方は賊軍となって滅びることになりました。この結果、義時は政所別当に加え、義盛が持っていた侍所別当の職をも得て、北条氏の基盤を盤石なものとなりました。

#### 四、承久の乱での勝利

##### (一) 実朝の暗殺

和田義盛を滅ぼした義時ですが、今度は將軍実朝の暗殺事件が起こります。建保七年（一二一九）正月、実朝は鶴岡八幡宮に右大臣拝賀に行き、石段を降りたところで、頼家の息子であり、甥にあたる公暁に殺されます。この暗殺事件については、『吾妻鏡』と『愚管抄』に詳しく記されています。

まず『吾妻鏡』によると、義時は実朝のそば近くで太刀を持つ御剣役でしたが、鶴岡八幡宮の楼門を通り抜けたところで体調が悪くなり、自邸に戻りました。義時の代役を務めた源仲章が義時と誤って殺され、義時はその場に居なかったため命を救われたといえます。ただし、あまりに義時に都合の良い展開になっていることから、江戸時代のころから新井白石らにより、事件の黒幕は義時ではないかという説が唱えられています。

もう一つ、歴史小説家の永井路子さんが出した三浦義村黒幕説もあります。義村の妻が公暁の乳母であることと、義村も右大臣拝賀の供奉人の中に名前が見えないことから、義村が裏で公暁を操っていたのではないかという指摘です。いずれも『吾妻鏡』の記述に依拠している説です。

次に『愚管抄』を確認しましょう。『愚管抄』にも、義時は御剣役であったとみえますが、義時は門前で待機し、石段の上の本宮には同行しなかったと記す点は、異なります。実朝は本宮での拝賀を終え、石段を下りたところ襲われますので、義時は事件現場に遭遇したことになります。ですから、『吾妻鏡』とは話が全く違ってきます。

実朝暗殺事件について、慈円は、右大臣拝賀に参列していた平光盛（頼盛の息子）から様子を聞いて『愚管抄』

を書いています。実際の現場に居た人から聞いた情報に基づいているので、かなり信用できる内容です。

したがって、『愚管抄』に基づいて実朝暗殺事件を読み解くと、義時は目の前で発生した実朝の暗殺、つまり武家の棟梁の殺害を易々と許してしまっただけです。当時の貴族たちからは、「武家の首長が簡単に殺される」とは、周囲の武士たちは何をやっていったのだ」という批判の声も挙がっていました。実朝を目の前で失ったことは、義時の生涯で最大の失態といつてよいでしょう。おそらく、『吾妻鏡』の編纂者はこの史実を知っていたものの、義時の失態をありのままに書くことはできないと考え、実は自邸に戻り、その場には居なかったという創作が生まれたのではないかと考えられます。

現在では、暗殺事件の黒幕はおらず、強い野心を持つ公暁の単独行動であったという考え方が主流になっています。

## (二) 公武関係の危機

後鳥羽院と將軍実朝は非常に親しく、公武融和の時代を迎えていましたが、実朝が急死したことによって、公武関係にも歪みが生じます。最大の問題は、次の將軍の選出です。実朝暗殺の前年、実朝に実子がいないため、北条政子は上洛して、次の將軍として後鳥羽院の皇子を迎えたい旨を相談し、内諾を得ていました。しかし、実朝暗殺後、後鳥羽院は皇子下向を拒否し、結局、この交渉は不調に終わりました。

最終的には、後鳥羽院が渋々認めるかたちで、貴族の九条家から三寅を將軍として迎えることになりましたが、この一件をもって、後鳥羽院との関係が悪化していきます。二歳の子が政治を行えるわけありませんので、三寅が成長するまでは政子が実質的な將軍として幕府を導きました。そして、義時は尼將軍政子を補佐しました。



さらに、事件が起こります。三寅の下向を知った源頼茂という武士が、源氏一門の自分こそが將軍になるべきであるという野心を抱き、後鳥羽院に対して、自分を次の將軍として承認するよう迫ったのです。しかし、これはうまくいかず、あろうことか大内裏に火をかけて亡くなりました。

このとき仁寿殿などいくつかの建物が焼けて、中にあった王家の宝物も失われてしまいました。相当なショックを受けた後鳥羽院の幕府への不満は頂点に達していました。

### (三) 承久の乱の勃発

こうして実朝が亡くなってから二年後、承久の乱が勃発します。承久三年（一二二二）五月十五日、北条義時追討宣旨が全国の武士に向けて出され、後鳥羽院は挙兵します。挙兵の知らせは、十九日には鎌倉に届きました。

後鳥羽院は、義時追討宣旨および院宣を押松という下人に託し、鎌倉の有力御家人たちに手渡すことを考えていました。義時の弟である北条時房や、三浦義村など八名に配れば、中には義時を裏切る者もいるだろうと思っていたのです。しかし、押松は鎌倉に入ってすぐに捕まり、計画通りにはいきませんでした。

北条政子の演説は非常に有名です。政子自身が多くの御家人たちの前で演説している印象があるかと思いますが、『吾妻鏡』によれば、政子自身は御簾の奥に控え、側近の安達景盛が政子の詞を代読しています。演説の後には、義時や大江広元が集まり、会議が開かれました。箱根・足柄の関で迎え撃つという案もありましたが、最終的には、すぐに攻め上ることに決まり、東海道・東山道・北陸道の三手に分かれて出発することになりました。『承久記』には、最終的に軍勢は十九万まで増えたと書いてありますが、本当かどうかはわかりません。ただ、次第に数を増やしながら、大軍で京に押し寄せたことは確かでしょう。

墨俣の戦いや瀬田の戦い、宇治川の戦いで勝利した幕府軍は、六月十五日、洛中に入ります。承久の乱というと、幕府方が圧勝したイメージをよく持たれますが、実はそうでもありませんでした。宇治川の戦いの場合、京方は二百五十五人の死者が出ていますが、幕府軍（北条泰時軍）も負傷者百四十四人、死者九十六人ということで、勝利はしたものの、かなりの犠牲を払っていたことがうかがえます。

時房は京都の東から、泰時は南から、それぞれ洛中に入りました。後鳥羽院は降伏し、京方の武士たちを見捨てて追討宣旨を撤回しました。鎌倉に留まっていた義時のもとにも、すぐに戦勝報告がありました。安堵したことでしょう。

この承久の乱は、先ほどの坂口太郎さんのお話を聞いているとすごく意味のある戦いで、負けた方の京方は承久の乱での敗北を長く恨み、リベンジの機会を狙い、のちの幕府滅亡にまでつながっていくといえます。

承久の乱後には、政子・義時主導で戦後処理が行われました。後鳥羽院の配流や皇位継承権への介入、参戦した貴族・武士の所領没収など、前代未聞の肅清を武士が行ったのです。本来、天皇の選任権は、治天の君だけに与えられた権限でしたが、そこに幕府が介入することになりました。

冒頭でも述べたとおり、近世以降、義時は「不忠の臣」と評されるようになりました。その背景には、承久の乱とその戦後処理の問題があります。ですので、最後の「第五章」では、義時の死をめぐる問題と後世の評価について述べたいと思います。

## 五、死をめぐる謎と後世の評価

### (一) 死をめぐる謎と墓所

義時は承久の乱の三年後、貞応三年（一二二四）六月十三日に亡くなりました。死因は史料によって異なり、『吾妻鏡』には病死、『保曆間記』には他殺、『明月記』には毒殺と書いてあって、これまでの研究では毒殺説が有力視されています。

亡くなった時の様子をもっとも詳しく記すのは、『吾妻鏡』です。亡くなる前日の記事には、「義時は、日ごろ心身を悩ませていたけれども、それほど深刻ではなかった。しかし、今回は危篤に陥っている」とあります。そして、亡くなる当日の記事には、「日頃、脚気の上、霍乱計会すと云々」とあり、脚気と暑気あたりが重なり亡くなったということなのです。

坂口さんのお話のなかで、晩年の後宇多天皇が脚気のために起き上がることもできなかったという話がありました。だが、義時も下半身がむくんでしまう脚気を患い、さらに暑気あたりも重なって亡くなったのです。

ここで義時の死因に関する新出史料をご紹介します。「湛睿説草」と言う聖教で、称名寺の別当である湛睿という僧侶が書き残したものです。このなかに、義時の四十九日法要の際の表白が含まれていました。

表紙から、貞応三年閏七月二日、名越朝時が父義時の四十九日の法要を主催したことがわかります。実は、この表白のなかに、義時が亡くなったときの様子が書かれています。「痛みがあつて、床に伏しがちだったが亡くなった」ということです。「痛み」については具体的に書かれていませんが、先ほどの『吾妻鏡』の記事を踏まえようと、

脚気による脚の痛みであると考えることができます。ゆえに、立ち上がることが難しく、床に伏しがちだったということでしょう。以上より、私は義時は病気で亡くなったと考えるのが妥当だと思っています。

義時の死から二カ月後、墓所として法華堂が建立されました。重要なのは、義時法華堂が建立された場所です。それは、初代将軍源頼朝の法華堂の東隣でした。

幕府の創始者である将軍頼朝の隣に、一家臣である義時が葬られたのです。尼将軍政子の差配によるものでしょう。おそらく、政子としては、義時を権威化し、頼朝と並び得るほどの別格の存在であることを、この法華堂の位置で、目に見える形で示したのではないかと考えます。承久の乱の勝者であり、武家政権の礎を築いた義時は、当時から幕府の保護者として認められた存在だったのです。

## (二) 北条泰時への継承

尼将軍政子は、義時法華堂の建立の他に、義時の後継者問題にも関与していました。これは伊賀氏事件とも呼ばれる一件です。政子としては、北条氏の家督および執権職を義時の長男である泰時に継がせたいと考えていましたが、義時後妻の伊賀の方は、実子である政村を据えたいと考えたため、対立が生じました。

政村の烏帽子親は三浦義村で、政村の「村」は義村の一字を拝領しています。伊賀の方の周辺に不審な動きがあることを察した政子は、義村に対し、「どうも怪しい動きがあるけれども、承久の乱で幕府方が勝ったのは、泰時の功績である。次は泰時が継ぐべきなのだから、あなたも泰時に忠誠を誓いなさい」と迫っています。さらに、翌日には泰時のもとに行き、義村ら有力御家人たちを呼びだして、後継者は泰時であることを宣言し、伊賀一族を流罪に処しました。政治家政子は、泰時政権への道を拓き、この翌年に亡くなりました。

(三) 揺れる義時評

最後に義時の死後の評価についてお話しします。最初に、日蓮による評価です。日蓮は、義時のことを「国主」と表現し、「文武極め尽くせし人」として非常に高く評価しています。また、日蓮は頼朝と義時を並べて書くことも多いです。例えば、「右大将家、<sup>〔頼朝〕</sup>権の太夫は、正直の頂、八幡大菩薩の住む百王のうちなり」とあり、二人の政權掌握を肯定しています。このように、日蓮が義時を頼朝に匹敵する人物であると認識しているのは、非常に興味深いことです。

また、冒頭で武内宿禰の話をしました。が、死後二十年、三十年経った頃から、義時は神格化されます。『古今著聞集』という、京都で成立した説話集や、『平政連諫草』という、鎌倉で成立した史料にも、義時は武内宿禰の再誕、すなわち神格化された存在として登場します。

細川重男さんは、義時は承久の乱を平定したことによって、頼朝とともに武家の創始者として評価された、ゆえにこのような伝承が生まれたのではないかと指摘されています。

次に、室町幕府の義時観です。室町幕府は京都に置かれますが、最初は、鎌倉に置くべきか、京都に置くべきか議論がありました。そのときの問答をみますと、鎌倉派の意見として「頼朝が初めて御所を構え、義時が承久の乱に勝利して天下を支配しました。したがって、武家にとって鎌倉は縁起のいい場所です」と言っています。鎌倉幕府滅亡後も、武家政権の創始者は頼朝と義時であり、承久の乱が人々の記憶に強く残っていたことがうかがえます。次に、南北朝期の評価です。北畠親房の著した『神皇正統記』をみますと、武家政権に対する不満はむしろん持っていました。が、義時個人に対しては、あくまでも後鳥羽院が挙兵して攻めてきたため、義時はそれに対して兵を挙げたにすぎないということで、後鳥羽院を批判しています。

しかし、近世以降、義時は強く批判されるようになります。もともと辛辣なのは、新井白石の『読史余論』です。「本朝古今第一等の小人物」と批判し、「後鳥羽院を配流に処した不忠の臣であり、そんな悪いやつだから、將軍実朝を殺したのもきつと義時に違いない」と書いています。

その一方で、勝海舟は『氷川清話』のなかで、義時を「不忠の名を甘んじて受け、自身を犠牲にし、国家に尽くした人物であると捉え、「幕府瓦解の際（江戸城無血開城のときのこと）には、せめて義時に嘔くづられないよう、幾度も心を引き締めた」と述べています。勝海舟は、義時が後世批判されることを承知のうえで朝廷と戦ったと捉え、自身ものちに逆臣と批判されることは分かっているけれども、せめて義時に笑われないように無血開城を成し遂げたいと考えていたのです。

明治時代になると、歴史の教科書に承久の乱や義時も登場しますが、戦争が始まりますと、天皇の神格化が進んでいきますので、後鳥羽院を流した義時は、「不忠の臣」の代表として紹介されるようになります。一九四〇年代になってくると登場さえせず、承久の乱も義時もなかったことになっています。

義時の評価は、社会状況や評価する側の置かれていた立場によって大きく変わったといえるでしょう。

## おわりに

最後に、義時の人物像に触れて終わりたいと思います。人柄をうかがわせるようなエピソードがなかなか残っていないのですが、真面目で有能な政治家であったのではないかと思います。また、義時がこれだけ権力を握ることができた要因として見過ごせないのは、頼朝の後家である姉政子の存在です。頼朝の権威を引き継いだ政子の力を

背景に、義時は実務に奔走し、政争を勝ち抜きました。

義時は、悪く言われることも多いのですが、義時の生きた時代というのは、実朝暗殺により源氏將軍の血が途絶え、承久の乱で朝廷と戦うことになるという、鎌倉時代おおよそ百五十年のなかでもかなりの危機に直面しているのです。しかし、この難局を見事乗り越え、幕府が瓦解することはありませんでした。義時は、「幕府の保護者」であったと評価してよいでしょう。ご清聴ありがとうございました。

〈キーワード〉

北条氏 鎌倉幕府 武家政権